

O-109 熊本県八代山地中九州層群今泉層に関する問題点

坂本 大輔・田中 均(熊大・教育)・高橋 努(八千代エンジニアリング㈱)・柏木 健司(大阪市立)・利光 誠一(産業技術総合研究所)

Some problems on the Imaizumi Formation (Naka-Kyushu Group) of the Yatsushiro Mountains, Kumamoto Prefecture

Daisuke SAKAMOTO, Hitoshi TANAKA(Kumamoto Univ), Tsutomu TAKAHASHI(Yachiyo En. Co. Ltd), Kenji KASHIWAGI(Osaka City Univ), Seiichi TOSHIMITSU(AIST)

熊本県南西部八代山地の日奈久帯には、下部白亜系の中九州層群が分布し、下位から川口層、八竜山層、袈裟堂層、今泉層に区分される。このうち、日奈久から袈裟堂をへて九折にいたる地域に分布する今泉層は、泥岩や凝灰質岩で特徴づけられる層準があり、これらからは中期アルビアンの有孔虫化石(Nishi et. 1989)やアプチアン～アルビアンのアンモナイト化石(村上 1996)などが報告されていた。今泉層が中期アルビアンとすれば、宮地帯に分布する前期アルビアン後期の八代層と一部同時異相の関係を示したり層序関係が逆転することになる。このため今泉層の一部(日奈久層)を四国の物部川層群相当層として考えていた(田中ほか、1998)。

今回、演者らは今泉層分布地の中央部にあたる今泉川右岸流域より、放散虫化石およびアンモナイト化石を得ることができた。本講演では、得られた放散虫化石およびアンモナイト化石の年代について報告し、今泉層と八代層との層序関係やその帰属問題について言及する。

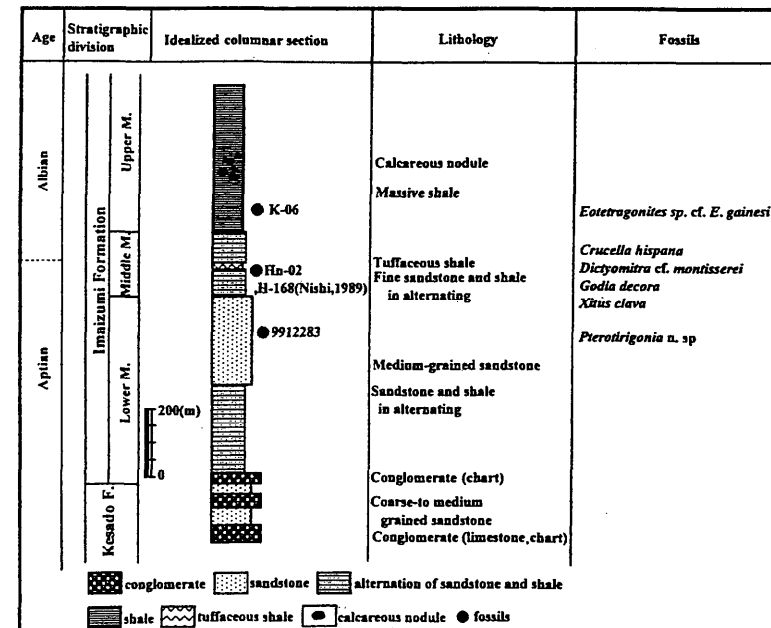
今泉層は、主に岩相に基づき、下部層、中部層、上部層に区分される。下部層は、礫岩からはじまり砂岩と泥岩の互層をへて灰白色の塊状砂岩からなる。灰白色の砂岩(9912283)には、*Pterotirigonia* n. sp を密集する層準がある。中部層は暗灰色で中～細粒の砂岩と泥岩の互層からなる。中部層の最上部には凝灰質岩を挟む。上部層は塊状の泥岩からなり石灰質である。泥岩中には石灰質ノジュールを含む。

中部層の凝灰質岩(Hn-02)からは、保存状態の良い放散虫化石が得ら

れた。とくに時代決定に有効な放散虫化石は *Crucella hispana*, *Dictyomitra* cf. *montisserei*, *Godia decora*, *Xitus clava* などであり、これらが示唆する年代は、後期アプチアン～前期アルビアンである。

また、アンモナイト *Eotetragonites* sp. cf. *E. gainesi* が上部層の塊状泥(K-06)から得られ、これが示唆する年代は前期アルビアンである。

放散虫化石やアンモナイト化石が示唆する年代や層序関係から判断すれば、今泉層が前期アルビアン前半であることを示している。この事実は従来指摘されていた今泉層と八代層の関係が同時異相ではなく、今泉層が八代層の下位に位置することを示している。さらに、今泉層から産出する二枚貝化石 *Pterotirigonia* n. sp はその下位の袈裟堂層から産出する *Pterotirigonia* (*Pterotrigonia*) *kesadoensis* とその上位の八代層から産出する *Pterotirigonia* (*Pterotrigonia*) *hokkaidoana* との中間タイプを示す。このことは、袈裟堂層、今泉層、八代層と一連の堆積物であることを示している。したがって、今泉層は中九州層群を構成する累層であることが明らかとなった。



Columnar section of Imaizumi Formation.